

## ジェネリック・スキルとしてのライティング能力養成のための作文推敲指導法開発の検討 —小中一貫校組織デザインを生かした、教科横断型の対話的な言語活動の観点から—

石島照代（日本学術振興会 特別研究員（東京大学））

【研究の背景と目的】ジェネリックスキルライティング（文章産出）活動を含む不特定多数とのコミュニケーションを目的とした能力は、社会人としてのジェネリック・スキルのひとつである。しかし、文章産出時に読者視点を含んだ推敲指導が十分にでき

時点	6月	9月(介入実験1)	11月(介入実験2)	11月	2月(介入実験3)	2月	3月(介入実験4)	3月
介入内容		「ガスバーナーの使い方マニュアル」(理科)	「3色の旗をたくさん作る方法」(算数)	効果測定課題①	「竹取物語の5人の求婚者」(国語)	効果測定課題②	「ようこそ、私たちの学校へ」(社会)	効果測定課題③
口頭説明時の相手		5年生	5年生		5年生		大学生	

ていないという問題が明らかになっている。そこで本研究の目的として、読者意識 (Audience Awareness, e.g. 岸, 2009) に注目し、持続力のある効果的な作文推敲指導法の開発の検討を行った。具体的には、作文の推敲指導時にピアレビューと口頭説明を組み込んだ推敲指導法「内容を事前に知らない人に伝えるように書きなさい」という意識の養成 (石島, 2012) を行い、同一集団について経時的にデータを取る縦断デザインを採用することで検討した。これにより、持続力のある効果的な作文推敲指導法の開発に関する、具体的な示唆を生徒と指導する教師の両方の状況を分析することで目指す。また、小中一貫校で実施することから、組織デザインの効果も同時に検討した。

**実験参加者** 都内の小中一貫校の7年生80人(男子37名・女子43名)が、介入実験に参加した。介入実験は、小学校・中学校(社会)両方の免許を保有する小学校籍教諭(教師歴37年、社会と数学)と中学校籍教諭(教師歴12年、国語)が行った。口頭説明の相手は濱田(2007)を参考に、3回は小学校5年生に、最終回は外国人留学生を相手に行った。実験参加者はまず1000文字程度の課題文の要約と(要約部)、その要約した内容を踏まえて自分の意見を述べる(意見部)ことを求められた。なお、実験介入中、評価ポイントの事前提示や書き方の指導は一切行っていない。

### 研究1:ピアレビューと口頭説明効果を組み合わせ合わせた持続力のある作文推敲指導の効果の検討

介入実験中の状況、および事前調査と4回の効果測定課題(要約部・意見部)の検討によって行った。作文の質の評価では、1)「たとえ文」の数、2)事前の課題内容を知らない評定者5名(大学院生、教育学部出身の社会人)による「分かりやすさ」評定など量的・質的に検討した。その結果、1)たとえ文は1月の効果測定課題までは一切見られなかった。効果測定課題②でようやく発生し、効果測定課題③ではさらに増加した(研究2参照)。2)事前調査時の産出作文は半数の53枚が完全白紙だったが、11月の効果測定課題時は40枚に、2月は17枚、3月は12枚と減少した。また、「わかりやすさ」を椿本(2014)に基づき、「課題文内容とのマクロな一貫性の有無(問題と結論の内容がずれていないこと)」に基づいて評定したところ、効果測定課題③の「わかりやすさ」は、事前調査と比べて有意に改善された。これは、2月の介入実験が、全員が口頭説明を求められる介入になったことが大きく影響したと考えられる。

### 研究2:作文推敲時における個人の読者意識活性化プロセスの検討

介入実験の「事前・中間・事後課題」および事前調査と4回の効果測定課題との関係から、個人の読者意識活性化プロセスの分析を行った。9月の介入実験後、「自分は伝えているのに、わからない5年生が悪い。もうやめたい」と苦情が続出した。9月と11月の間に効果測定課題がないのは、生徒からの苦情に考慮したためである。事前調査時の白紙回答も53枚と多く、当初の計画通り進まないと考えられたため実験中止も協議された。しかし、「相手に伝えるように文章を書く力は生きていくために絶対に必要な能力。生徒の将来のために最後までやろう」という学校側の熱意もあり、「どうしたら伝わると思うか?」と5年生という読者に向き合わせ続けた。2月の介入実験中にある男子生徒が「5年生に説明するときになにかに例えて説明したらいいのではないか?」ということに気が付き、周囲が模倣し2月の効果測定課題から増加した。

### 研究3:小中一貫校における小学部教諭と中学部教諭の協働によるライティング教育効果の検討

①「相手に伝えるように文章を書く力は生きていくために絶対に必要な能力。生徒の将来のために最後までやろう」という学校側の熱意、②7年生と5年生という異学年団の先生方にご協力いただいたこと、③小学校の時の大好きな小学部の先生のもとで、作文指導に熱心な中学部の教師のもとで生徒が頑張れたことが、介入実験の成功につながったと考えられる。